

七友会 だより

「3月11日」を前に

七友会会長 佐原 和典



新年早々、記録的な大雪と寒さに日本列島が被われ、2月に入っても降り止まぬ雪で、たいへんな日々となっています。それでも、あの「3月11日」がやってきます。もう1年…なのか、まだ1年…なのか、時を刻む針の動きが不確かなまま続いています。心落ち着かせ、改めて思い起こしても、一生に一度だけであってほしい出来事でした。

この1年の間に、どれほどのことが進んだのかは、後の人が検証するとしても、多くの人々が少しづつ前を向いて歩み始めたのは唯一の救いではないでしょうか。昨年7月、七友会が30周年の事業として「震災からの復興祈念同窓会」を開いたのは、前を向く何かの切っ掛けになれば…という思いからでした。全国から多くの方が集まり、これからも何か支援し続けようと誓い合いました。もちろん、復旧、復興のための動きは官民問わず続いていますし、NPOなど多くのボランティアの方々が地道な活動をしています。遠く離れた地で鬱鬱としている私には頭の下がる思いでもあり、活動する方々のエネルギーには感心しています。

同窓会は「岩手に縁ある者として…」と、どちらかと言えば、岩手を離れた人々の思いで活動してきました。それは、決して地元の人々の考えや活動を軽くみていたわけではなく、少なくとも今までは会の活動を支えてきたのは県外の会員が多かったということの表われにすぎません。各地域での年代を越えた同窓生の集まりが、会の活動の根幹ですし、幸い、盛岡で少しづつ動きがでてきましたので、これが各地に波及し、7月の討論会でも指摘された「会員同士の繋がりの強化」へと深化していけばと期待しています。ただ、活動を支える事務局が会員のボランティアで行っていることで、何らかの制約が生じているのも事実であって、これを改善していくためにも、皆さんの積極的な関わりをお願いします。

「祈念同窓会」という大きな行事のあとは、どうしても活動に精彩を欠いてしまいます。11月には、実行委員会の反省会も兼ねて、決算会議を開きました。予算執行上は、特に問題はなく、あとは「30周年行事DVD」関連の支出ぐらいで済みそうなのですが、予定していた「年度内発送」が難しくなっています。納めるデータの選択や全体のデザインなどに思った以上の労力を必要としていて、来年度前半（今年の夏前あたり？）の完成・発送をめざしています。楽しみにしている方も多いと思いますが、もうしばらくお待ち下さい。もう一つ話し合われたのは、学部と共同でできる継続的な活動についてです。もちろん、震災からの復旧、復興への支援の一助になるものですが、一つ検討されたのが「同窓生の実学講座」のようなものの開催です。同窓生が自らの仕事について、在校生に語る場を継続的に設けることで、同窓生の生きざまを知ってもらうとともに、在校生にとっては職業観を養ったり、就職活動の参考にもなるのではないのでしょうか。さらに広げれば、同窓生同士の繋がりを強め、異業種交流や広域での関わりができることは、被災地の復興に役立っていくのではとも考えています。現在、昨年と同窓会に参加された方を中心に講師を探すとともに、新年度からの開催を検討しています。気軽に、でも実のある「講座」にしたいと考えていますので、実施方法や内容についても、意見がありましたら、事務局までお知らせ下さい。

この3月で、人社からは5名の先生方が定年退官されます。今回は、そのうち、砂山、海老澤両氏に「思い」を寄せていただきました。学生の頃には知らなかった事も多々ありますが、その全てが人社の歴史でもあります。ぜひ御一読下さい。

目次

「3月11日」を前に	1
鴻爪雪泥	2
定年退職を迎えて	3
会員の皆さん、連絡先をお知らせ下さい	6
退官される先生	6
次の方々の情報をお寄せ下さい	6
「学部就職ガイダンス」開催される	6
今後の予定	6

訃報

～牧 前学部長 ご逝去～

2月28日(火)3時頃、牧陽之助 前学部長(2月に学部長を辞任)が亡くなりました。心よりご冥福をお祈りいたします。

葬儀等は近親者のみで執り行い、供花や香典は遠慮したいとのことです。なお、3月中旬に偲ぶ会を行う予定とのことです。

これらの情報は、すでにホームページ(jinsya.com)に、のせていますが「偲ぶ会」の日程等もわかり次第のせますので、ホームページ(jinsya.com)の「新着情報」をご覧ください。

鴻爪雪泥



国際文化課程 アジア文化コース 中国思想史・中国文学 砂山 稔

私が岩手大学人文社会科学部に赴任したのは1978年4月1日で、今から34年前のことである。教養部の改組により前年の5月2日に人文社会科学部が誕生してから2年目で、学部誕生以来、毎年13名ほどの新任教員が盛岡にやって来て、学部が完成した4年目には、教養部からおられた方々40名程と合せて90名を超える規模になったのだから、財政状態が厳しい現在の国立大学法人では、最早想像もしにくい状況である。

当時の学部は1学部1学科2コース6講座を主とする編成で、地域文化コースに地域文化基礎講座、アジア研究講座、欧米研究講座、社会科学コースに行動科学講座、法学講座、経済学講座が所属し、他に科学論講座、基礎自然、外国語の講座が置かれていたかに記憶する。

赴任早々よくお世話になった鬼澤貞先生、小池稔先生サイドの話では、学芸学部時代に滝浦静雄（東北大学に転任）先生たちと語り合っ、まず、教養部として独立し、後に学部創設を目指したとのことであったが、これは広島大学に総合科学部ができたその波に乗って、人文社会科学部創設に成功されたからこそ語り継がれた逸話であろう。

総合科学部を目指していた学部創設が、結果として人文社会科学部となったことについては、当時の責任者であった草間俊一学部長は「自然科学系が脱落した時は、血の小便が出た」とその苦労を話しておられた。学部創設後もやれ理学部創設だの、やれ教育学部に出て行くだの、最近まで自然科学系の迷走は続いているが、学部では理系教員を優遇して来たのであるから、人文社会科学部の発展に自然科学系は協力して貰いたいものである。

総合化と専門深化は、人文社会科学部創設以来、2つの柱とされている。その総合化の中心となる科目は、学部創設当時は必修の「科学論」であった。ところが「科学論」の教員には実施運営の責任負担が重すぎるとのことで円滑に行かず、しばしば教授会の議論の種になった。これは結局、進藤浩一学部長の時、「総合科学論」に改められ、全教員が「合理性と非合理性」「部分と全体」「環境」「情報」「ジェンダーとセックス」「現代の学問と平和」の6研究班のうち何れかに所属し、各研究班がそれぞれ1つの授業を担当する体制が整えられて現在に至っている。創設当時の総合化の核となるべき「科学論」に比べると格段に改良されたと言って良いであろう。

さて、赴任の当時、アジア研究は日本史の草間先生と国文学の広瀬朝光先生のおられたところに、東北大学文学部の助手から私が加わっての3人だった。草間先生は学部長の仕事でお忙しく、31歳の助教授として授業担当は初めて、大学運営に内側から参画するのは初めての私は、広瀬先生の話聞きながら本格的に大学教官の道に足を踏み入れることになったのである。日常的な会話の相手、遊び相手の広瀬先生は、全く楽しく申し分のない方だったが、講座の運営の面では、如何だったか。それは、アジア思想史の佐藤道郎先生、アジア史の深澤秀男先生、日本思想史の藤原暉先生等々の方々が着任されて明らかになって行き、草間先生の後任人事を巡っての確執へと発展してしまったのである。ただ、当時のことを思い返すとそれぞれが「国文学」のような狭い専門領域を大事にし過ぎたのではないかとの感を深くする。

因みに言えば、私は学部に総合的研究の芽を育もうとして、宮沢賢治研究会を作ったり、現在も岩手豊稷学—宮沢賢治を中心とした岩手の研究—の19名の研究グループを率いて活動しているが、これも学部創設の頃の苦い思い出と無関係のものではない。

赴任して3年目の春、1980年には深澤先生、川本榮三郎先生と学生7人と共に改革開放の始まった中国を訪れた。訪問先は北京・上海・西安。隋唐時代の道教を研究している私は訪問先に西安が入ることを条件に同行したのだが、この旅行が3年後、北京の中国社会科学院世界宗教研究所に3ヶ月の間、留学する呼び水になり、やがてはロンドン・パリに10ヶ月の間、文部省の在外研究員として留学する端緒を開くものとなった。

敦煌文書を研究しているのであるから、1度は文書の発見された敦煌莫高窟を訪れたいものと考え、数年前、敦煌訪問を敢行。敦煌へは西安から飛行機で2時間とあったので、曾遊の地でもあることから西安にも数日滞在した。内陸の経済発展の中心の一つである西安は煤煙がひどくやや興ざめしたが、玄宗皇帝と楊貴妃のロマンスの現場である今は興慶宮公園の中にある沈香亭、また驪山の華清宮などは、1980年の旅行の当時と余り変わらぬ様子であった。ただ、かつて終南山を眺めた長安市民の行楽の地であった楽遊原に足を運ばなかったのは心残りである。

人文社会科学部は、2000年からは人間科学課程、国際文化課程、法学・経済課程、環境科学課程の4課程を擁する現体制に移行し、その改革の際には、国際文化課程設立の責任者として微力を尽くした。その改革前後の記憶が生々しいのは当然であるとしても、人文社会科学部に赴任し、第1期生が卒業するまでの3年間の記憶が、30年前のものとは思えぬ程に今も鮮明であるのは、それだけ印象が強かったからであろうか。

定年退職を迎えて



海老澤 君 夫

この立場で語るとなるとどうしても過去を振り返ってしまいます。教養部のドイツ語担当の教師として盛岡に来たのは37年前のこと等々、このまま続けますが、1年目は教師にとってもやはり特別な年なのでしょう。担当したのは受講生70人位の大きいクラスでしたが、その中のかなりの人の名前や顔を後々まで覚えていましたし、何人かは今も覚えています。2年目以降の人たちは—もちろんこの35年間ではかなりの人を覚えていますが—不思議とそうはなりません。私の場合は来て3年目が人文社会科学部創立の年となり、この時も「1年目」を味わいました（もっとも1回生の私の担当は2年生の時だったと思います）。当時はドイツ語教員、特に文学が専門の教員が多く、その中でも一番若かった私は最初の10年くらいは「専攻学生」に縁遠い方でした。その分少し離れて人社全体、岩大全体の学生が見える位置にいたとも言えましょう。専門科目でよく担当したのは「上級ドイツ語」でしたが、ここには行動科学、法学、経済学等の専攻学生も多くきていて、多彩かつ活発でした。一方、一時は10人を越えたドイツ語教員もその後は外国語の選択状況の変化や、必修単位数の減により退職者の不補充状態が続き、今は5人になっています。今年度2人が定年退職する（私のほかに能登先生が退職されます）のを機にやっと一人が補充されますが、約20年ぶりの新規採用となり、教員の平均年齢もかなり若くなります。

定年退職者の弁としてはちょっと物足りない感じですが、私の場合はこの後も生活が大きく変わることはなさそうです。引き続き盛岡に住むことになり、また週2回のドイツ語授業もあります。またいわゆる研究も幸か不幸か道半ば……、何年か後には何か変わることもあるでしょうが、今は軟着陸体勢というところです。ただ密かに持っていた（というほどでもありませんが）「教師とは踏み台、(大学)教師の仕事は挑発」の看板はもう下ろそうと思います（そして「教えることは学ぶこと」という「裏」看板も）。最近、かなり多くのレポートをシュレッターにかけました。内容的に残しておきたいレポート類がしばしばあって、その都度とっておいたものですが、30数年分となるとかなりの数になります。それをなお惜しいと思いつつも、一方では「これも教師の煩惱かな」などとも思い、それを焼くような気持ちでシュレッターにかけたことでした。

さて、たまたま順番が回ってきてここに綴っている私ですが、この機会に同窓会の方々をお願いをしたいと思えます。一つは人文社会科学部という名称に関してです、これは創設当時から意味がはっきりしないなどといわれたものですが、私は最初から、例えば人文学部などよりは学部の実態に合う名称と思っていました。また少し後には人間の在り方を多方面かつ統一的に研究する学部の名称としては最良のものだと思うようになりましたし、最近では総合大学には必須の学問領域の一つ、人文社会科学の分野が岩手大学にもあることを外部にはっきり示すためにも、この学部名は必要ではないかとも思っています。この場でこんなことを言うのは、我が人文社会科学部は学内で度々名称変更の対象にされてきた／いる？からです。同窓会の皆さんにその良さを理解していただくのは（釈迦に説法かもしれませんが）その存続の地域からの支えを得る第一歩と思うからです。

2つ目は上記と無関係ではないのですが、同窓会活動の主力を、地域ごとに同窓生の集まりの場を作ることに注いでもらえたら、ということです。卒業回数も30回を越え、卒業者数も6000人を越えて、今や同窓生は各地域、特に東北の至る所で活躍していると思われれます。色々な意味で地域内の対話が必要な今、その一つとして例えば入社で学んだという共通の基盤の上に適度な広さの地域内で年代、職種を越えて人が集まり、自由に情報・意見交換するのは有益でないかと思えます。ある時期の固定的人社学部ではなく、年々改革されていく人社、加えて自分の歩みとともに変わってきた同窓生各々の心の中の人社（の心、今から作るのもいいのしょう）がそのような集まりの支えであればと思います。少し落ち着いてみれば、目の前にあるのはどうも（ぬるま湯につかりつつ？）しぼんでゆきそうな我が日本社会です。こんな時に一番必要なのは派手に踊る人でもなく、ただ流される人でもない、人文科学的視点で社会をしっかりと見つめながらメリハリをつけて着実に歩んでいく中堅の一团ではないかと思えます。

最後になりましたが、いろいろな意味でありがとうございました、とともに皆さんが各々の持ち場で活躍されることを退職後も心からお祈りいたします。（東日本大震災・原発事故にも触れるべきだったのでしょうか。しかし亡くなった多くの方を前にしては言葉が続かず、また人災の側面を思えば余計な言葉が限りなく出そうだったので、結局は控えさせていただきます）

会員の皆さん、連絡先をお知らせ下さい

同窓会では、毎年このような会報を発行しています。これらを皆さんに送るためには、連絡先の把握が重要になりますが、転居等で連絡先が不明になることが多く、現在、4割強の方が不明状態になっています。

連絡先は現住所でも実家等家族住所でも構いませんが、確実に連絡のつくところをお願いします。転居等の際には郵便局への届出と共に、事務局へもお知らせ下さい。

なお、寄せられた情報は同窓会活動のみに利用されるもので、事務局で一括管理されています。また、会費については、ほとんどの方が入学時に納められていますので、特に請求されることはありません。同窓会活動は、ほとんど会員のボランティアで運営されています。今後の学部の発展及び同窓会の親睦のための活動に、ぜひ御協力下さい。

※友人で会報の届いていない方は、連絡先不明になっている可能性があります。すぐに事務局までお知らせ下さい。

連絡先情報

Form with fields for Name, Graduation Year, Address, TEL, FAX, E-mail, and Family Contact.

退官される先生

今年3月末で定年退官される先生方は、以下のとおりです。最近では多い5名と聞いています。連絡を取りたい方は、まだ時間がありますが、お早目に!!

なお、同窓会からは、ささやかではありますが、記念品を贈ります。

- List of retiring faculty members including 砂山 稔, Farr Alan, 海老澤君夫, 能登 恵一, and 高野 修.

次の方々の情報をお寄せ下さい

次の方々は震災あるいは原発事故のため、会報が配達されず、新たな連絡先も不明になっています。安否情報あるいは連絡先等の情報をお持ちの方は、事務局までお知らせ下さい。

〈震災〉

- List of members affected by the earthquake, including 渡辺 伸也, 三浦 良仁, 佐藤 智美, 鈴木有香里, and 大上 和彦.

〈原発事故〉

- List of members affected by the nuclear accident, including 湯澤 智幸, 今村 昌彦, 横山 裕美, 西 扶美子, and 渡辺 友美.

※鈴木有香里さんについて

田村さとしさんより、御家族の確認はとれていませんが、鈴木さん(大槌町役場勤務)は、亡くなったのではないのでしょうか。との連絡がありました。

鈴木さんに限らず、ひき続き、被災地域の会員の方の安否確認をしています。「会報が届いていれば無事が」と思っていますが、無事な方も、できれば事務局まで一報下されれば幸いです。よろしくお願ひします。

「学部就職ガイダンス」が11月15日に開催されました

今年度の「学部就職ガイダンス」は、昨年度よりも早く、11月に開催されました。第一部では、(株)テレビ岩手報道制作局次長兼報道部長の遠藤隆氏(人社 一期生)による「社会で役立つ企業人～報道マン・人社OBの視点から～」と題して講話がありました。第二部では、就職内定者も加わって就職活動体験談や情報交流が、中央学生食堂でおこなわれました。軽食や飲み物もあって、やわらいた雰囲気の中にも、真剣な様子うかがえました。特に、大学院生や留学生の就職熱が高く、外国人採用の情報不足を心配していましたが、最近の報道で、留学生などを積極的に採用する企業が増えていることを知り、少しほっとしています。

今後の予定

- List of future events: 平成24年3月23日(金) 岩手大学卒業式・修了式(会長出席) and 平成24年6月9日(土) 評議員会(予定)

岩手大学人文社会科学部同窓会 <七友会>

Contact information for the alumni association, including address, phone, fax, and email.

ホームページもご覧ください!

Website URLs: http://www.shichiyukai.net/ and http://www.jinsya.com/